

2018 年 2 月 21 日

中央大学ライティング・ラボ 2018 年度後期活動報告書

抄録

2018 年度後期の実施セッション数は 547 件、稼働率は 66.7% (昨年同時期 69.8%) であった (I-3)。2018 年後期の傾向としては、以下が挙げられる。まず、ラボを再利用する学生の増加である。教員に推奨され初回の利用をした学生が、他の講義のレポートや卒論執筆の際に再利用するというケースが散見された。各チューターがセッション内で再利用につながる工夫をすることで、アカデミック・ライティングの継続支援へとつながったといえよう。次に、特定留学生による頻繁な利用である。特に、日本人大学院生不在の研究室に在籍する留学生はラボのニーズが高く、頻繁な利用が見られた。一方、留学生が予約可能枠 (1 日 2 セッション最大 2 日まで予約可能) を最大限に利用することで、日本人学生 (特に学部生) からは「予約がとりづらい」という声が上がっている。ラボの利用機会の公平性について検討する必要がある。

66.7%という稼働率は、希望してもセッションを受けられなかった学生が多かったことも意味する。そのため、今学期も学生側からコマ数増加や週 5 日開室の要望が寄せられた。しかしながら、現在のラボの人員規模ではこれ以上の需要には対応することができない。従って、2019 年度も週 4 日 1 日 2 ラインによる開室を維持する。

しかし、現状維持をすることで、チューターの超過勤務、セッションの質の向上・維持のための研修時間の不足、緊急性の高いセッションの受付不可、広報活動の時間不足という問題も継続することが予想される。チューターの超過勤務については、来学期からの時間割変更に伴い、セッション間の時間を長くすることで緩和を図りたい。その他の課題についても対応していくために、現在の人員規模を維持する限りは、来学期以降も 60%程度の稼働率を目指したい。

以 上

はじめに

2018 年度後期におけるライティング・ラボの活動状況について、以下の通り報告する。
Ⅰでは開室状況と利用実績、Ⅱではセッション以外の活動、Ⅲでは来期にむけて特筆すべき
所見を述べる。

Ⅰ 開室状況と利用実績

Ⅰ-1 開室期間と日数、チューター配置数

開室期間 2018 年 9 月 11 日から 2019 年 1 月 25 日までの月曜・火曜・木曜・金曜

開室日数 62 日

設置セッション数 820 コマ¹

スーパーバイザー (SV) : 中野玲子 アソシエイト・スーパーバイザー (ASV) : 阪口毅
チューター数 13 名 (一人当たり 4~8 コマ担当)

Ⅰ-2 受付方針 (2018 年度後期)

受付優先順位および予約の可否は、文章の種類 (対象文章かそれ以外か) に基づく。

1. 対象文章

授業で課題となったレポート及び発表レジュメ、卒業論文、修士論文、博士論文、
投稿論文、プレゼンテーション原稿 (スライド用・口頭用)、研究計画書、ボランテ
ィアセンター報告書、総合政策部プロジェクト活動報告書

2. 空きがある場合につき、受け付ける文章 (予約不可)

奨学金応募書類に含まれる志望動機書

留学志望書

公務員試験練習課題

そのほか、アカデミック・ライティングの観点でコメントできそうな文章

外国語／日本語翻訳 (授業の課題のみ)

3. 受付不可とする文章

就職活動関係の文章 (キャリアセンターへ案内)

メールや手紙の文章

公務員試験以外の筆記試験対策のための相談

¹ 稼働可能なブース数すなわちチューターの配置数をコマとしてカウントした。

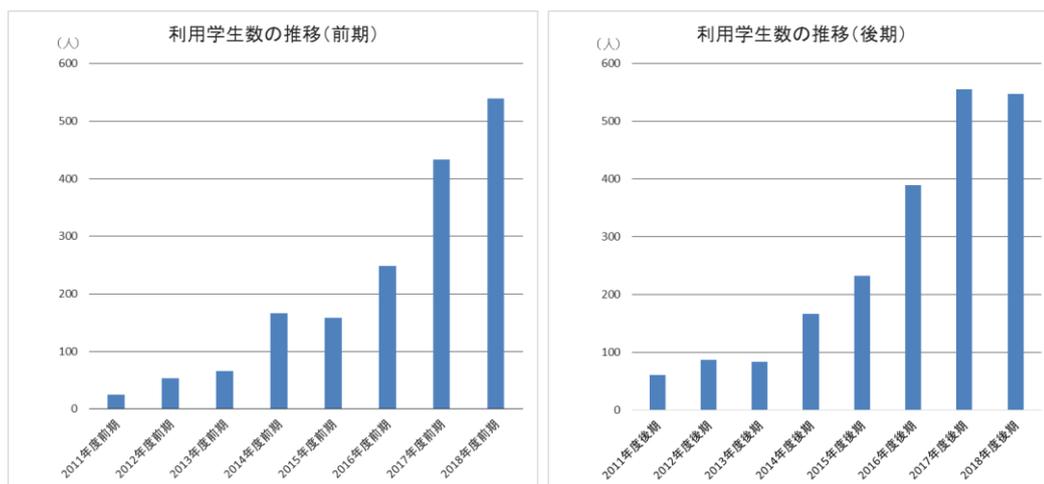
I-3 実施セッション数と稼働率

実施セッション数（延長を含む）： 547 コマ（前年比 98.6%）

セッション稼働率：66.7%（前年度 69.8%）

表：月別セッション設置数と稼働数

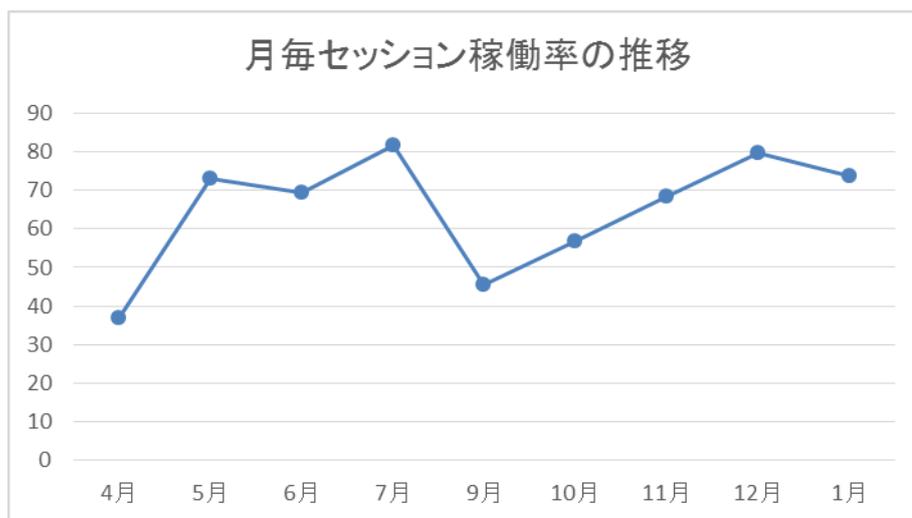
	設置数	稼働数	稼働率(%)
9月	77	35	45.5
10月	208	118	56.7
11月	209	143	68.4
12月	182	145	79.7
1月	144	106	73.6
合計	820	547	66.7



注) 2013 年度より日本人学部生の利用が開始された。

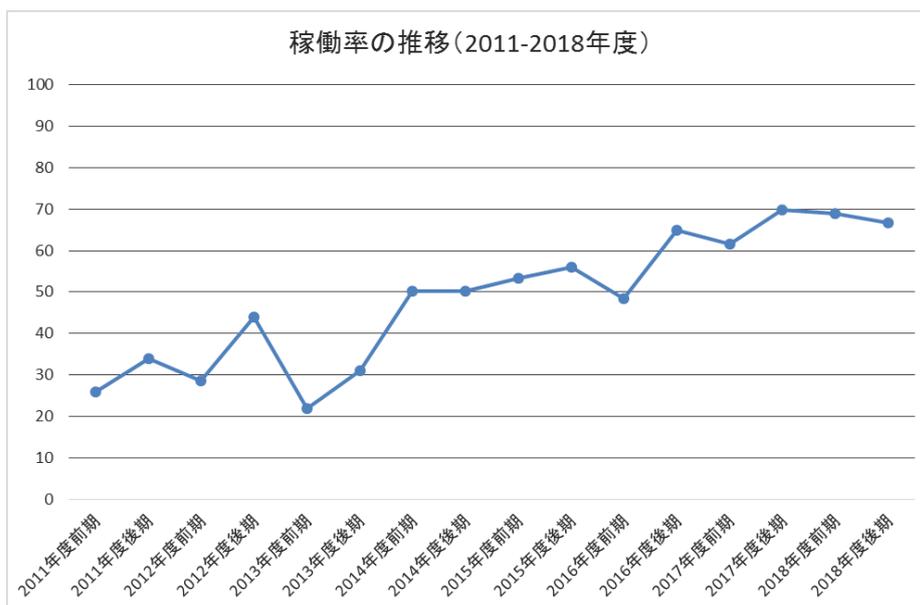
【所見】

大幅増となった 2017 年度からの利用学生数が維持された。来年度以降の週 5 日開室にむけての確実な需要が見込まれるが、現在のチューター人員規模ではこれ以上のセッション受付は困難となっている。



【所見】

例年通り、白門祭以降需要が増え、卒論・修論の執筆時期である12月にピークを迎えた。ピーク時には予約枠も全て埋まり、チューターはほぼ空きコマなしで勤務する状況となった。チューター人員規模が課題ではあるが、可能であればピーク時の臨時セッション枠増加を検討したい。



【所見】

2016年度後期に急上昇した稼働率が維持された。特定の教員との協力関係が持続したこと、また昨年度末に実施した講演会をきっかけに学内での周知が広がったことが、高い需要を支えたといえる。平均稼働率は昨年度後期からは70パーセント弱となっており、研修・広報・緊急性の高いセッションへの対応が困難になっている。ラボの円滑な運営を考慮にいと、稼働率60%程度が望ましい。利用者からは、予約がとりづらいという声が寄せられているが、現在のラボの人員規模では、これ以上の需要には対応できない。

I-4 利用学生の内訳

*利用学生数（延べ）²

2018年度後期合計 547名（前年比98.6%）³

大学院日本人学生	22名（前年度11名）
大学院留学生	216名（202名）
学部日本人学生	258名（284名）
学部留学生	51名（45名）

【所見】

「学振道場」の効果により、大学院日本人学生の利用が2倍となった。複数回利用の大学院日本人学生も増え、チューターのセッションスキルが向上したことが要因と考えられる。大学院留学生も増加傾向にあるが、アカデミック・ライティングの手法を全く知らない学生が散見された。より効果的な指導を実施するためにも「留学生のためのアカデミック・ライティング」の受講を勧めていきたい。学部生からは、ピーク時に卒論やレポート執筆が重なり、予約しづらいという声が寄せられている。早い時期からの利用を促していきたい。

*利用学生の所属

法学研究科	19名
経済学研究科	20名
商学研究科	22名
文学研究科	80名
総合政策研究科	97名
公共政策研究科	0名
法学部	76名（うち法学部通信教育課程3名）
経済学部	48名
商学部	66名
文学部	91名
総合政策学部	25名
公共政策学部	0名

*利用学生の学年

学部1年	99名
学部2年	42名
学部3年	36名

² 延べ利用数。実施セッション数に基づくため、同一学生の同一日利用および連続セッションを含む。

³ 教授会での教員への広報、および「出張宣伝」による学生への広報活動の成果と思われる。

学部 4 年	112 名
学部 5 年以上	20 名
博士課程前期／修士 1 年	9 名
博士課程前期／修士 2 年	150 名
博士課程前期／修士 2 年以上	1 名
博士課程後期 1 年	17 名
博士課程後期 2 年	53 名
博士課程後期 3 年	3 名
博士課程後期 4 年以上	3 名
研究生	2 名
科目等履修生	0 名

*利用学生の母語

日本語	280 名
中国語	261 名
モンゴル語	1 名
英語語	1 名
韓国語	2 名
広東語	2 名

I-5 相談文章の種類

卒業論文	101 件
修士論文	141 件
博士論文	4 件
授業のレポート	126 件
ゼミ論文	24 件
投稿論文	72 件
研究計画書（入試用）	7 件
研究計画書（入試用以外）	8 件
ゼミ及びプレゼンのレジュメ	15 件
発表用口頭原稿	3 件
その他	46 件

※その他の内訳

奨学金応募書類、ゼミエントリーシートなど

I-6 ネット予約状況

学生が使い方に慣れ、HP 上で空き情報を確認してから予約したり、早い段階から予約したりする学生が多数を占め、ネット予約による大きな混乱はなかった。総セッション数の46%がネット予約によるものである。

ネット予約月別数

9月	13件
10月	49件
11月	60件
12月	70件
1月	74件
合計	266件

I-7 利用学生からの評価——アンケート調査より

各セッション終了後、利用学生に任意でアンケート記入をしてもらった。アンケート回収数は403通。各質問項目と結果は以下の通りである。

1. セッションは有益だったか⁴

有益ではなかった	6件 ⁵
あまり有益ではなかった	1件
有益だった	57件
とても有益だった	338件
回答なし	1件

【所見】

自由記述欄より「考えられた」「気づけた」という利用学生の評価が何え、1対1で考える場を提供することの有効性が認められる。また、講義やゼミとは異なり、評価されないという安心した状況で、自分の思考と向き合える場としてラボを評価していることがわかる。

2. セッションまたはラボに対する要望など 【日本人学生・留学生あわせて】

○セッション数や時間について 計9件

- ・水曜日開室希望 1件
- ・コマ数増加 3件

⁴ 「有益ではなかった」「あまり有益ではなかった」「有益だった」「とても有益だった」の4段階評価。

⁵ 「1. 有益ではなかった」の6件中4件は、コメント欄に有益だったと分類できる記載があるため、「4. とても有益だった」の記入ミスと考えられる。

・時間延長 5件

【所見】

高稼働率のため、学期を通して予約がとりづらく、セッション増の希望が多かったと思われる。時間延長についても、連続セッションを実施することがピーク時はできなかつたため、要望が増えたと考えられる。

○チューターの専攻について 計2件

・担当チューターを学部ごとに配置する。(同内容他1件)

【所見】

毎学期見られる要望ではあるが、ラボは学問領域横断して検討できる場であることを学生に明示し、専門講義とラボの棲み分けについての理解を促進する工夫をしていきたい。

○ネット予約について 計2件

・C-plus や manaba のように中大 HP 内にラボのボタンが欲しい。(ネット予約が不便 他1件)

【所見】

現在のシステムはグーグルドライブをラボの HP に繋げて利用しているもので、中大 HP のサイドバーにつなげることは難しい。

○広報について 計7件

【所見】

4月5月で「出張宣伝」を実施しているが、利用する教員が限られているため、周知が徹底していないと思われる。今後は、チューターの人員規模の検討に合わせ、教員への周知方法を検討していきたい。

II セッション以外の活動

II-1 広報活動

II-1-1 授業への出張ガイダンス

全教員へ向け、チラシとメールで出張宣伝の実施を告知。宣伝はチューターが担当した。前期に引き続き1年次演習への出張が多かった。出張宣伝を利用する教員から、レポート課題においてラボ利用の推奨がされるため、利用につながるケースが多いと思われる。

*出張ガイダンス 計4件

II-1-2 ポスター掲示

卒論・修論の利用が増加する白門祭後に、ポスターを大学院棟と学部棟に掲示し、早めの

来室を呼びかけた。しかしながら、ピーク時は例年通りほぼ空きコマなし、という状況になったため、ラボからの声かけに加え、教員からも早い段階の利用推奨をしてもらうような工夫を考えたい。

II-2 チューター研修

チューターミーティング内で、「セッションでの質問の仕方に関する研修」と「ベテランチューターによる研修」を実施した。また、勤務時間内で個別研修を、白門祭前で稼働率が60%に満たない時期を利用して、実施した。チューター研修は、セッションの質の維持に欠かせないものであるため、今後も勤務時間内の個別研修時間を充分確保するための工夫をしていきたい。

【所見】

今期も、全学期を通して高稼働率を維持したため、勤務時間内研修時間の確保が課題となった。今後は、与えられた課題ではなくても、自分が担当したセッションの振り返りを、勤務時間内に他チューターと気軽に実施できるような風土を醸成していきたい。

II-3 シニアチューターミーティング

今年度新設のシニアチューターとSV,ASVによるミーティングを月に1度実施した。各曜日の課題ヒアリングや、新人チューター研修の進捗度合い確認に利用。SV,ASVの不在時に勤務するチューターの要望や課題の聞き取りを実施し、ラボ運営に反映させた。

チューターと一緒に勤務するシニアチューターからの意見はラボ運営上、大変参考になるため、来学期以降も継続したい。

II-4 学振道場開催

大学院生対象にアカデミック・ライティング及びラボの周知、また新人チューター対象に博論や投稿論文など難易度が高い文章を検討するセッションのためのスキルアップを目的としたワークショップを実施。準備段階から参加したチューターは、アカデミック・ライティングの観点、難易度の高い文章を検討するポイントなどについて学んだ。

【所見】中大大学院生のアカデミック・ライティングスキルの向上、またチューターのセッションスキル向上という目的をあわせ持つ。ラボのセッションの質向上のためにも来年度以降も継続したい。

II-5 中央大学杉並高等学校へのチューター派遣

*開室期間とチューター数

開室期間 2018年10月5日から11月9日までの火曜・木曜・金曜
開室日数 10日

チューター数 3名

【所見】

- (1) 前年同時期は76.47%であった稼働率が、今学期はさらに増加し94%になった。チューターの勤務時間を鑑み、セッション数を減少したことが要因と考えられる。勤務時間は減少しても、94%という高稼働率は、チューターの負担となるため、セッションの質を維持するための工夫を考えなくてはならない。
- (2) 人員規模の問題があり、来学期、派遣可能なチューター不在である。修士修了チューターのキャリア形成の場になることから、派遣の代わりに、修士修了のチューターを雇用できないか高校側に検討していただく。

Ⅲ 来期に向けた所見

Ⅲ-1 体制について

今学期は、チューター不足が大きな問題となった。稼働率を60%程度に維持でき、広報・研修・緊急セッション等に対応できる体制の構築を目指したい。

Ⅲ-2 開室曜日と時間について

来学期はSVとASVの勤務日の関係、また週の半ばの利用が多いことから、開室曜日は月・火・水・木とし、金曜は閉室する。また、来学期からの時間割変更に伴い、ラボのセッション時間を変更し、来学期から午前2枠、午後5枠に変更する。

Ⅲ-3 チューターの労働条件改善について

稼働率の増加により（平均約70%）、セッション報告の作業時間が確保できず、全セッション終了後に超過勤務せざるをえない状況になっている。来学期はセッション間の時間を従来より多くとることで対応する。

以上

2018年2月21日

スーパーバイザー 中野玲子

アソシエイト・スーパーバイザー 阪口 毅